



編集発行
群馬大学医学部同窓会

発行責任者 飯野 佑一
編集責任者 福田 利夫
〒371-8511
前橋市昭和町三丁目39-22
電話027-220-7861(ダイヤルイン)
FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ <http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/> 同窓会事務局メールアドレス tojoclub@ml.gunma-u.ac.jp



基礎講義棟 (改修工事後 平成26年3月)

目次

退任教授記念送別会 同窓会長 飯野 佑一 … 2	群大養心寮での生活 医学科6年 東 杏莉 …23
退任あいさつ 教授 椎原 康史 …………… 3	防災・減災の在り方を考える講演会の報告 同窓会長 飯野 佑一 ……………24
卒業おめでとう 同窓会長 飯野 佑一 …………… 4	医学部代表者及び新任教授との合同懇談会報告 同窓会幹事長 白倉 賢二 ……………25
平成25年度卒業生名簿 …………… 5	月岡関夫群馬県医師会会長就任祝賀会の報告 同窓会長 飯野 佑一 ……………26
新任教授紹介 病態病理学 教授 横尾 英明… 6	財団のページ ……………27
母校に望む④⑨	群馬大学が WHO Collaborating Centre に 指定されました ……………28
原町赤十字病院院長 竹澤 二郎 …………… 7	同窓会財政基盤強化協賛金の報告 ……………29
チェンマイ大学交換留学報告 …………… 8~11	役員会だより ……………29~30
水芭蕉④ 伊藤 晃子 ……………12	学内人事 ……………30
医療人能力開発センターだより⑨ ……………13	学外人事 ……………30
支部だより ……………14~17	謹告 ……………30
クラス会だより ……………18~20	編集後記 ……………30
健康支援総合センターの紹介並びに就任のご挨拶 竹内 一夫 ……………21	
学会報告 (同窓会補助)	
臓器病態外科学 教授 竹吉 泉 ……………22	
保健学研究科 教授 長嶺 竹明 ……………22	

退任教授記念送別会

第二の人生の門出を祝う

医学部同窓会・刀城クラブ

会長 飯野 佑一 (昭46卒)



今回は群馬大学大学院保健学研究科・リハビリテーション講座椎原康史教授お一人が定年退任されます。先生は臨床、教育、研究、地域医療面において更に学会活動や人材の育成など多大な貢献をされそのご功績は高く評価されております。また同窓会に対しましても何かとご尽力いただきました事に心より御礼申し上げます。それでは椎原教授のご略歴とご功績の一端を紹介させていただきます。

先生は昭和47年3月東京大学工学部、精密機械工学科を卒業され、同年4月に第二精工舎電子機器部に入社されました。IT技術者として月平均160時間余りを残業する超過重労働であったそうです。この時の経験が現在の産業メンタルヘルスへの関与につながっているそうです。3年間のサラリーマン生活後昭和50年4月に同社を退社され、同月に群馬大学医学部に入学されました。当時は学士入学という制度はなく6年間の医学部生活を送られました。昭和56年3月群馬大学医学部卒業後群馬大学医学部神経精神科に入局され、昭和56年4月～昭和60年3月まで群馬大学大学院医学系研究科、内科学系を専攻され、昭和60年3月に博士号(医学)を取得されました。そして同年4月に群馬大学医学部神経精神医学教室助手になりました。昭和61年4月より群馬大学医療短期大学部作業療法学科講

師、昭和62年4月同助教授、平成3年4月衛生技術学科助教授、平成8年10月群馬大学医学部保健学科・作業療法学専攻・助教授、平成13年4月同教授に就任され、平成23年には群馬大学大学院保健学研究科・リハビリテーション講座教授になりました。

研究面では統合失調症の事象関連電位の研究、皮膚電位を用いた自律神経系の研究、脳波のCAPと睡眠中SPR群発との異動の研究など成果をあげられました。学会面では、特に産業メンタルヘルスにおいて、日本産業精神保健学会・評議員、勤労者精神医療研究会・世話人、群馬精神医学会世話人として活躍し、貢献されました。学内の活動では、保健学科学生・大学院生のメンタルヘルス、相談などを中心に、教員・職員の相談にも時間を惜しまず応じてこられました。このことは保健学科独自の相談員制度の開設、更に総合健康支援センター設立準備委員会、産業メンタルヘルスの観点から、臨床心理士など外部カウンセラーの配置などを提言する事へと発展してゆきました。社会貢献としては産業のメンタルヘルスが主体であり、最近では若き日のご自分よりももっと悲惨な労働条件で精神的に破たんする若者たちを援助すべく積極的にかかわってこられました。群馬県においても群馬産業保健推進センター相談員、群馬県自殺対策連絡協議会委員として活躍され、プロジェクトの一つが平成25年度厚労省の自殺対策先駆事業に選定されました。

このように椎原教授の功績は大きく目を見張るものがあります。退任されますことは大変残念ではありますが、第二の人生の門出としてお祝い申し上げお送りしたいと存じます。先生の今後益々のご活躍をお祈りいたしますとともに、本学、本同窓会へのご尽力に心より感謝申し上げます御礼の言葉いたします。ありがとうございました。



退任教授記念送別会 (平成26年3月6日 刀城会館)

退任あいさつ

長い群馬大学での生活を顧みて

保健学研究科

教授 椎原 康史 (昭56卒)



私は熊本県水俣市で生まれ、9才で東京・杉並区へ転居、都立西高校から、昭和43年、東京大学理科一類に入学しました。この頃、大学は学生運動で騒然として無期限ストもあって、自宅で哲学・心理学・動物行動学など文科系の本を読みふける生活になりました。これは後に精神科医を志す遠因になります。

工学部・精密機械工学科を卒業後、第二精工舎(現セイコーインスツルメンツ)に入社。二次元のリニアモーターで駆動する電子製図機の制御ソフトの開発に従事し、月平均160時間余りを残業する超過重労働になりました。この時の経験が現在の産業メンタルヘルスへの関心につながっています。こうして、千葉県習志野市で3年間サラリーマン生活を送り、昭和50年、26才で群大医学部を再受験しました。入学式前日まで業務引き継ぎがあり、慌ただしく強風の前橋駅に降り立ちました。

入学すると、私のような『いわゆる学卒』が十数名もいて驚きました。入学後も会社の残務整理をした仲間もいました。当時は学士入学という制度はなく6年間を医学部で過ごしました(昭56卒)。

32才で群大精神科へ入局。研修医と大学院生活が同時に始まりました。テーマは統合失調症の事象関連電位(P300)でした。当時P300が測定できるのは東大だけで、専用測定機も発売されておらず、博論は手作りでの開発から始まり、夜中までまたまたソフトを組む生活になりました。4年後に学位を取得、助手になりました。

その頃、医療短大に赴任された小児精神医学専門の都筑等先生からP300の共同研究の話がありました。P300は注意機能の指標で、今まさにhotな話題となっている注意欠陥・多動性障害(ADHD)研究の入口に立っていたことになります。しかしその直後、先生は心臓発作で急逝されました。

その事件は私のcareerの大きな転機になりました。その後、モチリンの世界的研究者だった伊藤漸先生の誘いで、都筑先生の後任で医療短大に移りま

した。博士号はあっても業績もないまま、入局5年で急に独り立ちを余儀なくされました。以後今日に至るまで26年間を昭和キャンパスで過ごすという、臨床医としては珍しいcareerになりました。

実は荒牧時代、都立西高の先輩である教育心理の児玉昌久教授に皮膚電位を教わっていました。ここで再度先生の門をたたき、自律神経系の研究へ転じました。固定式の工業用直流記録計を利用して、月経前期の皮膚電位水準の上昇、統合失調症患者での平坦な反応、やはり都立西高の先輩であった麻酔科の木谷泰治先生の協力で星状神経節ブロック下での皮膚電位の低下などを確認できました。医療短大には当時holter心電計があり携帯記録に関心をもちましたが、皮膚電位は記録方式があわずアナログカセットテープに皮膚電位を24時間携帯記録するシステム(C-SPA)を開発しました(1993)。これは犬の腸管の蠕動運動を記録するストレングージを自作している伊藤漸先生の『originalな研究の源泉は、自前のTOOLで……』という教えに沿ったものでした。

24時間記録では、皮膚電位は覚醒時に高く、睡眠中に低く平坦なので、覚醒・睡眠の判別が可能でした。そこから睡眠研究に入って行きました。この携帯記録システムで昼間の午睡、運転中の強い眠気、睡眠中の途中覚醒などを確認しました。その後、皮膚コンダクタンスの測定機器と携帯記録も開発しました。

そのうち睡眠中に低振幅の皮膚電位反応の群発が連続する時間帯があることに気付き、その詳細な分析のために、振幅や時間分解能精度に限界のあるアナログ記録を改善してデジタル方式の記録システムを開発しました(D-EDA, 2004)。

最近数年は保健学研究科のリハビリテーション講座(OT専攻)の大学院生たちと、脳波のCAPと我々のシステムで記録された睡眠中SPR群発との異同を検討してきました。脳波記録をみれば客観的には眠っているはずなのに主観的には不眠を訴えるというmicro-arousalの自律系での根拠になると期待しています。

以上、長い群馬大学での生活を終えようとしていますが、今後は残った臨床生活を産業のメンタルヘルスに捧げたいと思っています。

若き日の自分のように、いや、時間的にも心理的にも、もっと悲惨な労働条件で苦しみ精神的に破綻していく職域の若者たちを援助すべく……

卒業おめでとう、諸君は 同窓会・刀城クラブ会員である

医学部同窓会・刀城クラブ
会長 飯野 佑一 (昭46卒)



卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。またご家族の方々のお慶びもいかに存じます。卒業後新たな人生を迎えるわけですが、益々の活躍と更なる飛躍を心から願っています。卒業後は個性豊かな人間として大きく未来へ向かってはばたいていただきたいと思います。今までに培われた礼儀正しさ、協調性、判断力など社会に出て十二分に発揮され、健康に十分留意して活躍していただきたいと思います。

さて、群馬大学医学部同窓会・刀城クラブは今年で創設62年を迎えました。昭和27年(1952)戦後7-8年のまだ混乱した中、母校への熱い思いを持って我々の先輩方が同窓会・刀城クラブを設立されました。刀城の刀は坂東太郎利根川の刀(利)、刀圭(薬を盛るさじの意、転じて医術を表す)に通じ、城は赤城山の城、更に城郭を意味します。群馬県前橋市に位置する母校の西側を流れる利根川、北方にそびえる赤城山など周囲の景観も含めていかに大切に思っていたかがわかります。将来の卒業生の「つ

ながり」を心より願い設立して下さったものと思います。以来、先輩方の息吹は脈々と受け継がれ、いまや同窓会会員数は6000名近くになりました。全国のみならず海外で活躍されている方も多数いらっしゃいます。建物はすべて新しくなりましたが、銀杏並木やヒマラヤスギを見るたびに先輩方の築いてこられた伝統の重みを感じます。また会員の皆様によりどころである刀城会館も同窓会総会をはじめとする同窓会関係の行事は勿論のこと、多くの会議や研究会など会員の活躍の場として幅広く利用されています。

群馬大学同窓会・刀城クラブ会則の第3条に「本会は、会員相互の親睦と研修を図るとともに、群馬大学医学部の発展に寄与し、併せて学術研究の向上に貢献する事を目的とする。」と記されています。根本は会員相互の親睦を図ることであり、卒業後も「つながり」を続けてゆくことです。各県には同窓会・刀城クラブの支部があり、必ず皆さんの先輩がおられます。そして後ろには医学部同窓会・刀城クラブ本部と群馬大学医学部が控えています。これこそが皆さんにとって大きな財産なのです。困ったときには同窓会の先輩方に気軽に相談してください。きっと皆さんに適切なアドバイスをして下さるでしょうし、力になってくださると思います。年に一度の同窓会総会への参加はもちろんのこと、所属支部での活動もよろしくお願いいたします。



学位記伝達式後の集合写真(平成26年3月25日 基礎棟前にて)

新任教授紹介

就任のご挨拶



病態病理学

教授 横尾 英明 (平4卒)

平成25年12月1日付けで医学系研究科病態病理学分野(第一病理学)の四代目教授を拝命いたしました横尾英明です。刀城クラブ会報の誌上で同窓会の皆様にご挨拶を申し上げる機会を賜り、厚く御礼申し上げます。

当教室初代教授の川合貞郎先生は昭和18年5月10日の前橋医学専門学校の開校式典にご出席され、後に二代目教授となられた石田陽一先生を一期生として迎えられ、瘦身で鋭い眼光を湛えていた石田青年のお顔と名前が一目で記憶に残ったと生前語っておられました。そのお二人の薫陶を受けられた中里洋一先生が三代目教授を務められ、教育と研究の両面で比類なき成果を挙げられました。私は中里先生の最初の大学院生として門下に加えていただき、以来21年間、一貫して教えを受けられたことは私の最も誇りとするところです。私の学生時代はまだ石田先生が教授として在任中でしたが、病理学総論の講義期間中ずっと私は体調を崩して床に臥しており、1回も講義に出席できず、当然の帰結として落第しました。そんな劣等生が四代目となり、天国の石田先生はきっと苦笑されていることでしょう。

私は前橋の西隣りの旧群馬町の出身で、すべての学歴と職歴が半径10km以内に収まるという、あまり自慢にならない経歴の持ち主ですが、今の私があるのは上記でも触れたように、学生の頃患っていた病気と大いに関係があります。私が自らの体調の異常に気付いたのは高校3年の初冬で、2月には入院を言い渡されました。入院の翌日に国公立大学の入学願書の提出日が控えていました。病院のベッドの上で一晩考えた末に出願先を自宅から最も近い本学に切り替えて、動機らしい動機もないままに入学してまいりました。入学式の2日前にようやく退院許可が下りましたが、日常生活は制限され、当時教育学部の学生だった姉に送り迎えしてもらいながらの大学生活のスタートでした。体育の授業は見るだけ、運動部なんてとんでもないという状況で、そ

の後もたびたび体調を悪くしては入退院や長期欠席を繰り返しました。学生時代、解剖学の柴崎晋先生には「苦しい時は私を見なさい」と激励を受け(柴崎先生をご存知の方々にはご理解いただけたと思います)、微生物学の橋本一先生には若かりし頃に結核で九死に一生を得た体験談をお聞かせいただき、薬理学の小濱一弘先生には「出席日数が足りなくても私がすべての教授に頼んで何とかしてやる」と鼓舞されるなど、辛く苦しい学生生活であったものの気持ちを切らさずに何とか6年で卒業できたのは、多くの先生方や友人たちのお力添えによるものです。

この一連の体験は私の愛校心を強いものにしました。こんな私を拾ってくださった中里先生と病理学に対しても非常に恩義を感じています。生粋の上州人として郷土愛も人一倍です。このような思いを胸に、この先の19年の任期中に本学や本学を取り巻く地域医療、そして病理学の状況を少しでも良いものにして次世代に引き継ぐことが私の使命であると心得ております。

ですが、実はそのいずれもがあまり芳しい状況であるとはいえないというのが私の現状認識です。本学は臨床研修制度の開始以来、若手医師の少ない状況が10年も続いています。同制度発足の前年に本学医学部は全国的にも早い段階で大学院部局化を達成し「医学部の勝ち組」として高揚感に満ちていましたが、今では医師不足が教育・研究・診療のすべての面で大学の体力を奪っています。それを挽回するための施策が色々と打ち出されていますが、担い手がいなくてはどんなプロジェクトも定着しません。一方で病理学分野に目を向けますと、すべての診療科の中で実は人材不足が最も深刻であると言われており、病理医不足が診療全体の足を引っ張るという事態がいま大いに懸念されています。

病理学は多くの診療科と関わりがあり、教育面でも多くの学年と接点があります。この自らの立場を十分に自覚し、全力を込めて本学ならびに本学を取り巻く地域医療を成長軌道に乗せたい、それと並行し多くの優れた病理医の育成を通して医学医療の下支えをしたい、というのが私の教授就任に当たっての抱負です。その一方で、自らの経験を踏まえて学業が順調にはかどらない学生さんの心の拠り所にもなってあげたいという思いもあります。お蔭様で今の健康状態には何の問題もありません。皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

母校に望む ④

地域医療の再生にも
イニシアチブを

原町赤十字病院

院長 竹澤 二郎 (昭53卒)



群馬県の医療は群馬大学医学部によって支えられてきたといっても過言ではないでしょう。創設されて70年、この間群馬大学医学部とその附属病院は基礎医学研究、臨床医学研究、医学生の教育、優秀な臨床医の育成、そして群馬県を含めた北関東における最高レベルの病院として、その役割を十分に果たしてきました。

最近では重粒子線治療をはじめとする高度・先進医療では全国的にも注目されており、その発展ぶりには喜ばしい限りです。また、母校の卒業生がこのところの教授選で選出されているのも同慶の至りです。地道な研究と努力が世界的に評価されてのことと思いますし、若い研究者の大変な励みになります。これを機会に全国から前途有望な若手医師や大学院生が集まり、群馬大学がますます発展していくこと期待しております。

こうした医療医学の進歩・発展の一方で、平成16年度から導入された新臨床研修制度以降、顕在化した地方病院からの常勤医の引き上げと診療科の閉鎖問題があります。群馬県に限ったことではないようで、全国の地方の市町村やへき地の中小病院では常勤医の確保が喫緊の課題となっています。私共の原町赤十字病院もその嵐の真ただ中にあります。医学の進歩とともに必要とされる医療知識と習得すべき医療技術が膨大になり、入院患者一人の診療にかかる担当医の負担は増加する一方で、自分の専門分野以外の重症患者にはなかなか手が出せなくなっているのが現状です。常勤医1人当たりの担当入院患者数にも限度があり、また当直業務も昔のように日勤に引き続き宿直業務を行い、また翌日も日勤業務を行う24時間を超えた長時間労働はさすがに法律的にも問題ですし、医師の健康を損ねてしまい、医療事故にもつながりかねません。こうした背景から、勤務医の都会志向、大病院志向にますます拍車がかかっているように思います。この傾向が続けば、地方の中小病院で働く常勤医は減少し続け、病院は廃院、地域医療の崩壊を危惧する状態です。

こうした事態になった原因はやはり研修制度の変更によるものなのではないでしょうか。昔を少し振り返ってみますと、私が入学した昭和47年ころは北関東には医学部は群馬大学しかありませんでした。医師国家試験合格後の卒業1年目は群大病院で研修を受けました。その頃は毎年100名を超える研修医が群馬大学のそれぞれの志望する診療科の医局に入局しておりました。もちろん当時から群馬大学の卒業生の半数は首都圏や出身地の大学病院に戻って研修していたと思います。それと同時に、群馬県出身で他大学の医学部卒業生がほぼ同数地元の群馬にもどって研修医になっていました。2年目からは所属していた医局からの派遣で関連病院の常勤医として3~4年ローテーションしながら働きました。遠方で誰も行きたがらない病院へも「山 duty」と称して論されて赴任したものでした。そういった地方の病院でひろくプライマリケアを修得しながら、それぞれが自分の進むべき医師の道を模索していたような気がします。そしてその当時の医局員の選択肢は群馬県に残り、大学かその関連病院で働くか、あるいは開業するかのどれかであったと思います。統計的にみますと群馬県内の医師数は昭和53年から63年の10年で2238名から3003名と765名増加し、昭和63年からの10年間では803名の増加でしたが、平成12年からの10年では496名の増加に留まりました。全国的にみても群馬県の医師数の伸びは平均を下回っているそうです。首都圏に流出したのでしょうか。

群馬県内の初期研修医の数は80~90名と落ちてきてきたようです。研修医の中にも内科・外科・救急医療を問わず幅広い実践的な医療を経験したい研修医と、早く専門医の研修を希望する医師もいると聞きます。大学病院の本来の機能や使命から考えても、プライマリケアやcommon disease症例を経験する病院としては非効率的で、多忙な大学の教官や研究者にとって大きな負担となっているのではないのでしょうか。初期研修は市中の基幹型研修病院を中心に考え、群大病院にはむしろ後期研修の専門医研修プログラムを充実させ、全国から群馬に多くの気鋭の若手医師が集まるよう県全体で専門医、指導医を育てる体制づくりの中心となっていきたいと思います。今私どもの病院に勤務している若い先生方はみな患者に優しく有能です。群馬大学の研修システムで育った先生方です。一人でも多くの若手医師に群馬で働いてもらいたいと思います。

チェンマイ大学交換留学報告

タイのチェンマイ大学との交流を終えて

和泉真太郎 (医学科5年)

このたびタイのチェンマイ大学との交換留学に参加させていただきましたので、ここにご報告させていただきます。

タイでは教授回診や医師によるベッドサイドでの学生への説明だけでなく、講義の際のスライドもほとんどが英語で行われていました。このように普段から英語に慣れ親しんでいる彼らは日常の会話はもちろん、医療に関しても英語を話すことに躊躇がありませんでした。そのような環境で二週間実習をさせていただけたことは本当に幸せであり、素晴らしい経験となりました。

チェンマイ大学医学部での実習で最も印象に残っていることは、夜間の救急部での二つの体験です。まず一つ目は急患の患者さんにCPR(人工心肺蘇生)をさせていただいたことです。群馬大学附属病院での実習中には実際の患者さんにCPRを行う機会も

もちろん、見る機会もなかったために今回が初めての経験でした。やはり講義や人形相手に得た知識でのCPRは不完全で、タイの救急部の先生に「Fully high. Fully high.」と何度も指導していただきました。あの感覚・指導は一生忘れることのない、生きた授業でした。もう一つは、一人の患者さんの最期をみとったことです。CPRをさせていただいた患者さんはその後亡くなってしまいました。人の死を目の前で見たことは初めてであり、また自分の肉親でも無いためか悲しみの感情は思ったよりも少なかったです。しかし、徐々に悲しみと後悔の念がこみ上げてきました。私のCPRの技術が不十分だったために助けられなかったのではないかと、もっと勉強していればよかった、という後悔です。今後医師になった際には多くの患者さんの最期をみとることになると思いますが、その際に今回のような後悔を決してすることの無いように、これからも勉学に励んでまいりたいと思います。

最後になりますがこのような機会を与えてくださり、深くお礼申し上げます。

タイから見た日本の医療

大塩 香織 (医学科5年)

この度タイ・チェンマイ大学との交換留学プログラムに参加しましたので、ここにご報告いたします。

チェンマイ大学では内科、外科、救急、家庭医と実習させていただき、私にとっては海外において初めて経験する医療現場だったので全てが新鮮で興味深いものでありましたが、日本とタイの医療において印象的であった相違点としては物資の豊かさが挙げられます。チェンマイ大学の学生は日常会話のみならず医学英語も非常に堪能でとても感心させられましたが、その理由の一つとしてタイでは医学書がタイ語に翻訳されていないこともあるので英語の教科書で勉強しなければいけないとの事情があることを知りました。また、外科では手術時に使用するガウン、マスク、手袋は使い回しであり、手術室だけでなく病棟などでもあちこちに利用可能な使い捨てのマスクや手袋がある日本の環境が衛生的である一

方、いかに贅沢でもあるかとういうことを実感しました。特に電子カルテやCT、MRIといった機械類も日本では充実しており、自分達は恵まれた環境で学んでいるという嬉しさの反面、患者さんのプレゼンを英語で簡単にできるチェンマイ大学の学生の姿を見ると、自分達の豊かさゆえの怠慢もまた思うところではありました。

海外の医療現場を見てみて感じたのは、医療が経済をはじめとしてそれぞれの国の体制や文化などに大きく左右されるものであるということです。そういう視点で考えた時、自分がどんな医師になりたいかということだけでなく、日本においてどんな医師になることが必要とされているかということも大事な点であると思いました。今回このプログラムに参加したことで外から日本の医療を眺める良い機会を得た他、チェンマイ大学の学生との交流も大変楽しく、とても有意義な時間を過ごすことができました。支援して下さいました先生方をはじめ、同窓会の皆様、事務の皆様がこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

チェンマイ大学医学部訪問記

織茂 賢太 (医学科5年)

私たちが今回参加したチェンマイ大学交換留学プログラムについて報告させていただきます。

まず、私たちが2014年1月5日～1月15日までの間タイ王国チェンマイ市に滞在し、その間チェンマイ大学医学部付属病院や周辺の医療施設で実習を行いました。その後、2014年1月20日～2月7日の期間チェンマイ大学の学生が群馬大学にて実習を行いました。例年は先に現地の学生を迎え入れ、その後3月～4月の間にチェンマイを訪問することになっているのですが、今回はお互いの予定の都合もあり上記の期間で訪問しました。1月は現地における乾期であり、冬季であるため例年の日程に比べて非常に過ごしやすく、伸び伸びと実習を行えたため結果的に良い日程であったと思えました。

チェンマイでの実習は、毎日各科を現地の学生と共に周るというものでした。講義や回診の多くは英

語で行われるため、理解には英語力がと集中力が必要されました。しかし、その分得られるものも多く、教育レベルの高さを実感しました。また、実習の一環として、エイズ孤児のための施設であるban rom saiを訪問しました。そこではタイにおけるエイズ孤児の痛ましい歴史や、現在の取り組みについて講義を受けることができました。

実習を通して私たち自身、現地の大学や病院を見学して驚かされる事がたくさんありましたが、逆にチェンマイの学生も多くを学んだとのことです。互いの国の医療、教育の現場を実際に見て比較し、ディスカッションをすることでさらにその相違に目を向ける事ができました。その点において、この交換留学プログラムはとても価値のあるものであったと考えます。

ここには語り尽くせないほどたくさん新しい事を体験し、学ぶ事ができたのでとても充実した実習となりました。最後になりますが、このようなすばらしい機会を与えてくださった同窓会の皆様、大学の諸先生方、学務課、総務課の方々に深く感謝いたします。

チェンマイ大学の医学教育に触れて感じたこと

亀田柚妃花 (医学科5年)

タイ王国チェンマイ大学にて臨床実習に参加してきましたのでここに報告致します。

今回の実習では、外科・感染症内科・救急部・小児科・家庭医療を二日ずつ回りました。特に家庭医療はタイ特有の診療科であり、マッサージと鍼灸が治療の一環として行われていました。足の動きが悪いという患者さんに対し医師が鍼で刺激したところ、次の瞬間にはスタスタと歩けるようになった光景には目を見張るものがありました。

医学教育に関しては、日本の医学生に比べ進んでいると感じる点が多々ありました。その筆頭は英語力です。タイの学生や先生方との会話は英語でしたが、その流暢なこと…。日常会話はもちろん、医学に関する専門用語も全て英語です。その理由は彼らタイの学生と授業を一緒に受ける中で分かりました。タイ語の医学単語がないのです。そのため教科書は英語で、普段の講義やカンファレンスも英語で行わ

れていました。一方、病気の概念や病態から英語で学ばなければならないため、母国語で学べる日本の医学生の方が深く理解ができるという話もありました。また、学生実習の内容もより臨床的で、薬の処方を含めた治療まで学生が考えます。日本では初期研修医が行う内容を6年生が行っていましたが、タイでは卒業後すぐに地方の病院で働くため、学生の間で即戦力を身に付ける必要があるそうです。実際、救急部での実習では心肺停止の患者さんに対しタイの学生と一緒に心臓マッサージを行い、小児科では身体所見を観察し病態について討論しました。

言葉も文化も違う国での実習でしたが、医療に関わる人々の気持ちや熱意は共通であり、医師としての知識や技術があれば異国の地でも医療に携わることができるのではないかと強く感じました。世界でも通用する医師になれるよう、これからも精進していきたいと思います。

最後になりましたが、今回このような貴重な経験をさせていただき、同窓会の皆様、大学の先生方、そしてチェンマイ大学の学友に心から感謝の意を申し上げます。

タイでの医学研修で得たもの

黒沢 哲生 (医学科5年)

本年1月、私はタイ王国チェンマイ大学医学部との交換留学プログラムに参加し、病院実習でとても貴重な経験を得ることができました。その成果をここに報告させていただきます。

タイ第二の都市チェンマイは北部に位置し、かつては首都として栄えた、日本でいう京都のような都市。1月は乾期、気温は年間を通して一番低い時期にもかかわらず日中は30℃を超える熱帯の地。そんな中、チェンマイ大学医学部附属病院の1つ、Maharaj Nakorn Chiang Mai Hospitalで、内科、外科、小児科、救急科を中心に実習を行いました。

驚いたのは、学生も先生も全員英語で議論を行うことです。使っているのは英語の教科書、講義は英語のスライド、学生による症例発表も英語でした。普段から英語に触れているだけあって学生たちは最新の論文についての知識もあり、非常に国際的な教育が行われていると実感しました。ベッドサイドで

は学生による患者さんの報告を先生が隔々までチェックします。その病態から治療までを考え、こういう意識で病気を考えなければいけないと思い知らされました。

医師不足の問題が深刻なのは日本と同じです。医師数そのものが足りていない上に、タイでも日本と同様都市部に医師が集中し、地方の医師不足が大きな問題となっています。医師不足を補う意味もあるようですが、学生は6年生になると薬の処方ができ、病棟でスタッフとして関わります。そのため早くから知識を身につけなければならず、学生たちはとても勤勉です。留学中、夜に寮が停電になったとき、外に出て街灯の明かりで勉強していた学生たちがいました。ただただ感心してしまいましたが、この姿勢を自分も見習って勉強に励んでいこうと思いました。

この研修で得られたのはこれら実習中に学んだことだけではなく、チェンマイの豊かな自然や文化、食事を知り、友人もでき、大変貴重な経験となりました。この機会を与えて下さった全ての先生方、そしてステイ先を提供して下さいました清宮先生に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

タイの医療に触れて

常岡 明加 (医学科5年)

この度、タイのチェンマイ大学との交換留学に参加させて頂きましたので、ここにご報告します。

チェンマイはタイ北部に位置するタイ第2の都市で、バンコクより涼しく比較的過ごしやすい場所です。チェンマイ大学では学生用の寮に宿泊させて頂き、家庭医や救急、感染症病棟、外科、小児科などをまわって2週間実習を致しました。

印象に残った事の1つにタイ独自の医療があります。タイには地域ごとの家庭医のようなものがあり、軽症な患者さんはそこで鍼灸やタイ式マッサージなどを受けて帰っていました。鍼灸を受けて膝の痛みが楽になりスムーズに歩けるようになった患者さんを実際に目の当たりにし、東洋医学を当たり前のように治療の一手段としている光景がとても新鮮でした。

もう一つ印象に残った事として、タイの医学生の意識の高さがあります。彼らは卒業したら地方に配属

され、即戦力として働く事が決められています。そのため実習は朝早くから夜遅くまで行われ、実践中心で当直等もしていました。寮滞在中、夜に大規模停電が起こったことがあったのですが、その際も廊下に机を出して非常灯で勉強している姿を見て大変刺激を受けました。また、タイの医学生のほとんどが英語を流暢に話していた事にも驚きました。タイ語の医学書が販売されていないため皆英語で勉強するらしく、英語でカンファを行ったリレクチャーがあったりと英語に対して抵抗感がないようでした。本プログラムに参加した事は、日本の医療について改めて考えるきっかけになりました。日本の医療が世界をリードするために、私自身も将来携わる者の一人として切磋琢磨しようと思いました。

最後になりますがこのような大変貴重な機会を与えて下さった和泉医学部長、久枝先生、同窓会の先生方、ご好意でタイの医学生を受け入れて下さいました清宮先生、各科の先生方、事務の皆様、ご協力頂いた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

チェンマイ大学留学思い出 Snap

1/08/2014
チェンマイ大学正門前



1/14/2014
KHUN MOR'S CUISINE
(タイ料理レストラン、farewell partyにて)



1/09/2014
Ai restaurant (タイ料理レストラン)



1/15/2014
Wat Chiang Man
(チェンマイ最古の寺院)



1/08/2014
チェンマイ大学病院の手術室にて



1/14/2014
Ban Rom Sai Chiang Mai
(バーン・ロム・サイ チェンマイ)



一 婦人科医として

いとうレディースクリニック

理事長 伊藤 晃子 (昭48卒)

大学を卒業して40年余り経ち、いまだに診療・家事に追われ、あわただしい生活をしています。

私は大学の卒業試験直前に結婚し、高校時代に産婦人科医になると決めていましたので迷わず、大学卒業後すぐに群馬大学産婦人科教室に入局しました。女性を診療する女医の必要性を感じていたからです。医局は松本清一教授が昭和47年に自治医科大学に移られ、昭和48年3月に五十嵐正雄先生が教授に就任なさったばかりの時期でした。大学医局内には女性医師はおらず、飯島恭子先生が群馬中央総合病院にいらっしゃるだけでした。医師が少ないため1年目から関連病院の当直が始まり、こわごわ当直をしながら早く一人前になりたいと必死でした。2年目には数人の先生方が自治医科大学へ移られより医師不足になり、半人前の私でも診療や当直に忙しい日々でした。

3年目の7月に長男を出産し、10月から外来診療担当で復帰しました。育児への夫(医師)の協力がほとんど得られず、昼間は病院近くの方に見ていただき、産科当直の時には子供を連れて当直しなければなりません。子供が病気の時は私が仕事を休まねばならず、せっかくの麻酔科研修も子供の病気で十分な研修ができませんでした。

4年目に県立がんセンターへの3か月間の出張が決まり、運転免許証がないため母子2人で病院の官舎に引っ越しました。がんセンターでは当直を免除していただき、託児所もあり大変助かりましたので、そのままがんセンターに勤務することにしました。がんセンターでは井上浩先生に細胞診断学を教えていただき、その後のがんの診断に大変役立っています。また、そこで多くの進行がんの方々の病気の悲惨さを見、早期受診の必要性を深く感じながら約4年間勤務しました。

昭和55年4月夫婦別居生活に終止符を打つため前橋に戻り、前橋赤十字病院に勤務しました。当直があるため親に援助を求め、約22年間日赤病院で妊娠から出産まで、そして婦人科診療全般にわたって診療してきました。たくさんの分娩に立ち会い、たくさんの誕生の喜びを分けてもらい、またがん患者さんたちと共に病気と戦ってきました。家庭では3人の子供達の育児に追われましたが、子供達が大学入学で親元を離れてからはそれぞれの子供達の処を訪れながら、小旅行を一緒に楽しんでいます。

日赤病院が地域医療支援病院となり、長く受診していただいていた患者さんを他医院へ紹介せねばならなくなりました。身近な医師でありたいと思っていた私にとって、日赤病院を離れる他はなくなり、今まで全く考えていなかった「開業」を決心しました。年齢や経済面など様々な心配がありましたが、少しでも患者さん方の相談相手になっていられるよう、平成14年8月に前橋市内にクリニックを開きました。予想以上にたくさんの方々が受診して下さい、婦人科女性医師の必要性を改めて認識しました。今は日赤病院時代の患者さん方との長いお付き合いがあり、その娘さん方も加わって更に新しいお付き合いも生まれ充実した日々を送っています。ただ勤務医時代と異なり、早朝から診療の準備をし、診療後はカルテ整理をするため自宅でゆっくり過ごす時間があまりないのがつらいところです。

女性は思春期、成熟期、更年期、老年期と女性ホルモンの影響を受けながら大きく変化していきます。思春期には身体の成長・変化にともない月経不順や無月経、月経困難症や摂食障害など心身共に援助が必要な場合がありますし、成熟期には妊娠、出産、育児などの大きなイベントがあり、更年期には更年期障害など、老年期には骨粗鬆症などと一生を通じて医師のサポートを必要としています。現在産婦人科領域でも診断・治療の進歩が著しく、開腹手術が内視鏡手術となり、生殖医療は特に目覚ましく向上してきています。先進医療に従事するのも非常に魅力的ですが、そういった医療が必要にならないように、疾病を予防し健康を守っていくことも大切な仕事ではないでしょうか。女性の健康は家庭の幸福につながります。これからも女性のための一臨床医としてお役に立っていきたいと思っています。

後輩の女性医師の皆さん、中断があっても出産や育児の経験が診療に非常に役立ちますので、是非仕事を続けてください。できれば婦人科医となって地域で働いてくださることを望んでいます。

医療人能力開発センターだより㊟

ぐんま地域医療リーダー養成
キャリアパスについて

臨床研修センター

副センター長 菊地 麻美(平7卒)

群馬県寄付部門として平成22年4月に医療人能力開発センター内に設置された地域医療推進研究部門は、平成25年10月10日より「群馬県地域医療支援センター (Gunma Medical Career Center)」としてその活動を継続・発展させていくことになりました。群馬県地域医療支援センター (GMCC) では、群馬県からの委託のもと、医師のキャリア形成支援と一体的に地域の医師確保を推進・支援する様々な事業を予定しています。組織上は、医療人能力開発センター長・田村遵一教授がGMCC副センター長を兼任し、地域医療推進研究部門の鎌田英男准教授・羽鳥麗子助教が、引き続き専任教員として業務にあたることとなりました。鎌田・羽鳥、両先生におかれましては、地域医療推進研究部門の実績を踏まえ、益々のご活躍をいただけることと存じます。

今回は、群馬県地域医療支援センターの様々な取り組みの中から、その中核事業のひとつとして現在準備を進めている「ぐんま地域医療リーダー養成キャリアパス」の概要をご報告いたします。

①背景

地域における医師不足や医師の偏在が社会問題となり、平成22年度の国による医学教育モデル・コア・カリキュラム (教育ガイドライン) 改訂の柱の一つに「地域の医療を担う意欲・使命感の向上」が位置づけられるなど、地域医療を担う人材の育成が求められる中、群馬大学では平成21年度より、群馬県内の地域医療に貢献したいという強い意志を持つ入試合格者判定の上位者に修学資金を貸与する「地域医療枠入試制度」を設けています。奨学金貸与の条件は、「卒業後、群馬県内の特定病院 (= 群馬大学医学部を卒業した医師が通常勤務することが多い、公立・公的病院や臨床研修病院などの県内の病院) に、奨学金貸与期間の5/3の期間 (= 6年間の貸与を受けた場合10年) 勤務すること」となっています。平成25年度末現在、医学科5年から1年生までに合計74名の地域医療枠学生が在籍しています。平成27年3月には、第1期生として6名が卒業を予定しており、28年度以降 (~36年度まで) は、毎年14名~18名程度の卒業生を見込んでいます。

地域医療枠医学生の卒業を1年後にひかえる中で、

地域医療に貢献する意志を持ち、卒業後の一定期間群馬県内で研修・勤務を継続する若手医師のキャリア形成、ならびに県内医療機関での活躍を、群馬県内の関係機関が一丸となって支援する体制の構築・整備が求められています。

②キャリアパスの概要

「ぐんま地域医療リーダー養成キャリアパス」の目的は、群馬県の地域医療に貢献したいという意思を持つ医学生の卒業後のキャリア形成支援です。将来、地域医療のリーダーとして活躍する臨床医に必要な「3つの力 (臨床技能: Clinical Skill, 科学的探究力: Clinical Research Mind, 医師としての人格: Character)」を、卒業後の10年間でバランス良く身につけることを到達目標としています。また、キャリアパス参加者が、様々な臨床現場で幅広い経験をつみ、地域の医療現場で役立つ診療能力を身につけるために「病院間・地域間ローテーション」という概念を取り入れました。具体的には、キャリアパスの運用にご協力いただく病院を、A・B・Cの3つのグループ (A: 地域の一般病院、B: 地域の中核病院、C: 教育・研究機関に属する病院) に分類し、キャリアパスに参加する期間中に各グループの病院を最低1施設以上経験すること (= 病院間ローテーション) と、群馬県内の4つの地域 (県央・北毛・東毛・西毛) の中から3つ以上の地域での勤務を経験すること (= 地域間ローテーション) を、参加者の経験目標に加えています。群馬大学地域医療枠卒業生に限らず、地域医療を志す医師に幅広くキャリアパスへの参加を認める予定です。

③今後の流れ

平成25年度末現在、群馬大学医学部附属病院の各診療科・部門においてパスの作成とブラッシュアップ作業を進めています。平成26年度以降、群馬県地域医療支援センターより、県内の関係機関 (特定病院・医師会等) に、キャリアパスの作成ならびに運用についてのご依頼を行う予定です。また、「ぐんま地域医療リーダー養成キャリアパス支援ネットワーク (仮称)」を設置し、関係機関間の情報共有や連携を促進するとともに、平成27年度のキャリアパス運用開始に向けて、群馬県全体で医師のキャリア形成支援に取り組む姿勢を広くアピールして参ります。

医師臨床研修制度の導入後、医学生の卒業後の進路やキャリアに関する志向は多様化が進み、優秀な人材の確保を目指す医療機関は全国区での競争を強いられる傾向が強まっています。一人でも多くの医学生が本キャリアパスを選択し、群馬県・群馬大学の将来を担う人材に成長していただくためには、魅力あるキャリアパスを多数運用していただくことが必要不可欠であると考えております。同窓会諸先生方のご指導ならびにご協力を、何卒よろしく願いいたします。

支部だより

平成25年度 埼玉県支部総会の報告

饗場 庄一 (昭31卒)

昨年は台風の数・規模ともに大変で総会の直前には26号台風が伊豆大島では土石流もあって50名からの人的被害をもたらしました。埼玉県支部総会を予定した10月26日(土)の直前には2つの台風の襲来が予報されました。今年度の総会の主催は第3ブロック(熊谷・深谷・本庄・行田・秩父地区)の幹事が担当でしたから従来行なわれてきた大宮市内での開催とは違って第7回にして初めて熊谷駅に近いキングアンバサダーホテルでの開催でした。もしJRの電車が運転中止にでもなりますと開催は全く困難が予想されました。そこで急遽中止を決定して出席予定者には幹事が手分けをして電話やFAXなどで伝えました。開催日は改めて決定して連絡することとしました。なにしろ11月も全国的な学会の開催が多く、総会で挨拶をお願いしてある飯野会長の予定や講演を依頼してある重粒子線医学センターの大野教授は韓国への出張予定などもあって今回の開催日の決定が難しく、相談の結果次の開催予定日は12月1日(土)と決めて会場その他の内容は同様として葉書での案内としました。

総会当日は先ず開会の挨拶と庶務報告で①は第3地区の役員人事の変更で、従来の幹事である饗場は支部長のみとなって副幹事の関東脳神経外科病院長の清水庸夫先生(昭46年)を幹事に、副幹事は従来の小川赤十字病院副院長の高橋泰先生(昭52)と今回新副幹事には秩父市で開業の浅海秀一郎先生(昭43)がなることを皆さんに承認していただきました。②は同窓会での地域医療貢献賞推薦のことで、以前、草加市で耳鼻科を開業の桂保平先生(医専1回生)を推薦申し上げましたがご本人から既に実地医療から引退しているので辞退したいとの丁寧なお手紙を頂戴して以来、埼玉県支部からは何方も推薦の機会がないので是非とも自薦・他薦で申し出

ていただきたいこと。同窓会事務局からの推薦依頼状は例年秋なのでよろしくと伝えました。

次に来賓として出席された飯野佑一現会長に挨拶をお願いしました。全国的に支部総会が彼方此方で開催されていて招待されて挨拶に廻っていることの報告や医大の先輩によって同窓会が創設された頃の刀城会の名称についての説明などされました。

特別講演は第3地区幹事の清水先生の司会ですすめられました。講師は群馬大学医学部重粒子線医学センター教授の大野達也教授です。以前、この会では平成20年の総会(第2回)に際して当時の副会長でした小澤瀨司先生が『重粒子線装置のプロジクト』と題して準備中の様子や期待される将来像を特別講演していただきましたが今回は大学に設置された施設としては世界でも5番目の稼働施設であり、平成22年3月に治療が開始されて25年8月末までに800例の患者さんを治療されての実際の経験が話されて、3つの治療室がフルに活動しているので1日に45~50名が治療されていること、前立腺癌、肺癌、頭頸部腫瘍、肝細胞癌、骨軟部腫瘍などそれぞれの特殊な例が治療対象とされてきていることや、当初は前立腺癌が全体の治療の80%以上を占めていましたが次第に他疾患例が増加してきていて最近では50%程になってきているなどを話されました。患者さんは群馬県内の患者さんが60%程度で近隣諸県のみでなく国内の全都道府県から集まってきていることなども話されました。また大学病院である総合病院の立場から重粒子線治療を含めた癌の集学的治療の開発への挑戦が既に始まっていることも紹介されて癌治療への明るく力強さを感じられました。質疑応答も行なわれて有意義でした。

懇親会は会場を3階のプリンセスの間に移して高橋副幹事の司会で行なわれました。参会者の自己紹介や楽しい発言があり、今まで過去6回行なわれてきた総会には出席されたことのなかった懐かしい多くの顔も見られて有益でした。

次の第8回総会は埼玉県東部の第4地区(草加市・加須市・岩槻市・久喜市・越谷市・春日部市・幸手市など)幹事の東靖宏先生(元埼玉がんセンター院長)、副幹事の池田均先生(独協医大越谷病院

小児外科教授)、野崎美和子先生(独協医大越谷病院放射線科教授)が開催の予定です。大勢の皆さんが集まって盛会であることを期待しております。

出席者の記念撮影はホテルの方にカメラを預けてお願いしましたがもう少し上手い構図で撮ってくればよかったと残念でしたが、前列右から武田文和(昭32)、松本修一(昭32)、大野達也(平5)、藤田達士(特、名誉教授・麻酔科)、饗場庄一(昭31)、飯野佑一(昭46)、清水庸夫(昭46)、東靖宏(昭

39)、今井育一(昭43)、浅海秀一郎(昭43)、伊田野脩(昭44)、黒住献(平19)、後列右から佐々木惇(昭55)、清水俊夫(昭59)、家富克之(昭53)、高橋健夫(昭63)、井上敏克(昭50)、大和田良一(昭58)、楮本清夫(昭58)、和田裕千代(昭52)、加藤真吾(昭58)、白石道雄(昭56)、安藤昭彦(昭53)、内田健二(昭51)、中神克尚(昭62)内山安男(昭47)、今城純子(昭57)、関誠(昭55)高橋泰(昭52)の諸先生です。



埼玉支部総会(平成25年12月1日 キングアンバサダーホテル)

刀城クラブ前橋支部総会のお知らせ

前橋支部長 大竹 誼長(昭36卒)

新緑の候、先生方にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、このたび、前橋支部総会を下記のとおり開催することとなりました。
ご多忙のところ誠に恐縮に存じますが、ご出席くださいますようよろしく
お願い申し上げます。

- 日 時**：平成26年4月24日(木)
午後7時30分より(本部役員会終了後)
場 所：医学部刀城会館
議 題：1. 新役員の選任について
2. 前橋支部規約の改正について
3. その他

※医学部正門を18時から開けておきますので、正門より入構してください。
なお、夕食の準備がございますので、出席の先生は同窓会事務局まで
メールまたはFAXでご連絡ください。

刀城クラブ伊勢崎佐波支部総会・ 忘年会報告

岡本 栄一 (昭63卒)

平成25年12月5日(木)午後7時よりプリオパレス伊勢崎にて、恒例の支部総会と忘年会が開催されました。この数年、総会には母校より講師をお招きしており、今年は同窓会長の飯野佑一先生に「同窓会の役割について」という会に相応しい題名でお話をいただきました。新入生の歓迎、卒業生のお祝い、新任、退任教授との懇談、今回も含めて全国の支部会との交流など、同窓会活動の一部を紹介いただくとともに、戦時中に前橋医学専門学校として開校し、前橋医科大学を経て群馬大学医学部となった母校の歴史を当時の貴重な写真を交えて説明いただきました。医学部附属病院の火事、初代学長である西成甫先生の骨格標本の話など、実際に経験した(見た)先生、先輩や教官から聞いたことがある先生、あるいはこの会ではじめて聞いたという若い先生、など年代によって反応は様々でした。刀城クラ

ブの命名のいわれ(利根川の刀と赤城山の城)も含め、母校のことを考えさせていただきよい機会となりました。講演の後、原先生(S36)の乾杯にて始まった忘年会はあっという間に時間が過ぎ、植竹先生(S46)の締め挨拶にて終了しました。

出席者(敬称略、数字は卒業年)は写真前列左より;古作望(S51)、植竹敏(S46)、本多隆一(S44)、岡本栄(S30)、飯野佑一(S46)、下條宏(S42)、荒井泰道(S46)、諏訪邦彦(S47)、鈴木豊(S47)、後列左より:岡本栄一(S63)、新井正明(S61)、田村卓彦(S63)、前田昇三(S58)、新田安紀芳(S55)、塩島正之(S59)、吉川大輔(S55)、細井勉(S56)、小内亨(S59)、大林民幸(S57)、望月裕文(S56)、小杉廣志(S57)、吉田寿春(S50)、南部真一(S59)、草場輝雄(S47)、森村匡志(H8)、山本巧(H6)、鈴木知明(S53)、角田祥之(H11)、木村吉美(S49)、写真には写られていませんが原富夫(S35)、でした。計30名、卒後15年から59年(平均36年)という幅広い年代が出席しました。今年は平成卒の会員の参加が増え、来年以降の会の発展に期待が持てました。



伊勢崎佐波支部総会(平成25年12月5日 プリオパレス伊勢崎)

刀城クラブ静岡県支部近況

吉田 孝人 (昭30卒)
林 泰広 (昭60卒)

2月1日(土)、浜松市の料亭「やま文」で平成25年度支部総会が本間誠一先生(昭43)の世話人代表によって開催された。吉田は現在横浜市在住だが浜松医大、静岡県庁でお役目を持ち続けているので名誉会員として出席して報告を担当した。

静岡県は新幹線駅が6つある東西に長い県で、静岡県支部は便宜的に東・中・西部に分かれている。静岡市中心の中部地区では故太田茂先生(昭23、静岡で開業)を初代会長とし古くから活動されていたと伺った。次いで望月達夫先生(昭23、静岡療養園開設以来60年勤務、昨年地域医療功労賞授与、卒寿)を会長として、星昭二先生(昭25、昭和43年静岡済生会病院へ赴任)、佐野正先生(昭57)らが中心に発展し現在に至っている。西部地区では、吉田が昭49年に浜松医大赴任時、既に故溝口勝司先生(昭23)、故小島春善先生(昭25)、故大迫武

治先生(昭38)、八木久男先生(昭40)らが開業されており、その後、本間先生、鈴木成欣先生(昭40)、大嶋正浩先生(昭55)が帰郷・開業、政本啓先生(昭49聖隷三方原病院)も開業、同窓生が10名を超えた。そこで夫人・家族同伴の上、各人から専門分野の講演を聞き、群馬の話を交えて親しく交流する浜松地区同窓会を開催、吉田の退官(平8年)まで続いた。一部の先生方は静岡市で定期開催されていた刀城クラブ静岡県支部総会にも参加していた。現在では若い先生方も増え、年一回の全県総会を各地域の輪番制で開催している。

今年は西部地区が担当した。第一回から皆勤の望月先生が所用で欠席、非常に残念であったが、昭23卒から平成23卒までの56人中19名が全県下から集合した(写真は先に帰宅された渡辺脩介先生(昭34)を除く参加者全員)。先ず、聖隷浜松病院で安全管理担当の林が「医療事故と医療安全」について約30分講演し、引き続いて出席者一同、新鮮な魚料理と美酒に舌鼓を打ちながら、世代の壁を越えて和気あいの団らんで盛りあがった。夜も更け一年後の静岡での再会を期して散会となった。(本文は卒を省く)



刀城クラブ静岡県支部・平成25年度総会(平成26年2月1日(土)浜松市・やま文)

後列左より：三島隆(平19)、赤堀彰夫(昭48)、中林圭介(平20)、中島孝(昭49)、黒沢崇二(昭49)、秋山仁一郎(昭55)、中島信明(昭54)、大嶋正浩(昭55)

中列左より：鈴木由美子(平9)、安川隆子(昭57)、斉藤憲(昭57)、林泰広(昭60)、佐野正(昭57)

前列左より：本間誠一(昭43)、八木久男(昭40)、星昭二(昭25)、吉田孝人(昭30)、橋爪一光(昭47)

クラス会だより

2013年度前橋医大 3回生クラス会報告

芹沢 憲一 (昭29卒)

恒例の2013年度クラス会を、11月10日上野精養軒で行いました。

今年は欠席が多く、8人のこじんまりした会となりました。リハビリ中の人や、体力が落ちてきたので、欠席……と返事した人もいます。

人数が減ってきたので、会の存続について話されましたが、なんとしても継続しようということになり、来年もまた、11月第二日曜日の正午から(11月9日)上野精養軒で行うことが決まりました。

懇談の中で、高校が同じ町田君から、ハワイで仕事をしていた服部君が、何年前かに亡くなつたらしいという話が出ました。同窓会にも通知が無い様ですが、ハワイでの出来事で、届けがされていないのかな…ということになりました。消息についてご存

知の方がおられたら、芹沢まで御一報ください。

なお、会の終了後、11月に行野君が亡くなられたという知らせをご家族からいただきました。

今年は、1月に深井君も亡くなられました。

以下、返事にかかれた欠席者の近況を報告します。伊藤君、腸閉塞でオペ、現在体調回復。

小内君、体力低下で欠席。加藤君、脊柱管狭窄の術後のリハビリ中、もう少しリハビリをして参上いたします。梶田君、週3回の手抜き診療中だが、近々引退を考えているところです。

金子賢義君、心臓不全が出ると思われるので欠席。白寄君、介護してもらおう予定の妻が1月急死、東京の子供たちも都合悪く欠席します。手島君、両側の膝関節症で歩行困難のため今回も欠席。大沢雄二郎君は、番地変更されたそうです。

出席者の中では、昨年欠席だった五味淵君が、階段を避けるため新幹線を上野でなく、東京駅でおりタクシーで上野へかけつけてくれました。

それでは医大3回生の皆さん、お元気で……。

松本君の撮った8人の出席者の写真を見てください。



前橋医大3回生クラス会報告(平成25年11月10日 上野精養軒)

後列左より:村上、阿部、芹沢、金子

前列左より:松本、生方、五味淵、町田

平成4年卒クラス会 兼池田佳生君教授就任祝い報告

担当幹事 相原 優子 (平4卒)

平成25年11月16日、高崎メトロポリタンホテルにて、平成4年卒の第3回目のクラス会が行なわれました。今回は、第1回目の大島清宏君救急部教授就任祝いと同様、平成25年7月に就任した、池田佳生君神経内科教授就任祝いをやろうとfacebookで盛り上がったのが始まりでした。一人で幹事をやるのは無理なので、菅野君にお願いしたところ、ホテルの手配などすべてやってくれました。おかげでクラス会開催にこぎつけたわけです。今や、同級生の半分くらいがfacebookに登録しているので、連絡するのも結構便利なものです。42人が参加し、皆いい年になってすっかり？外見は変わったのに、それぞれ順番に近況報告をしながらもヤジがとぶなど、会って話し出せば学生時代のままでした。学生時代にありあまるエネルギーをどう使っているのか分からずに感っていた多くの同級生男子諸君が、なんとまともになってみちがえるようであったことか(ごめんさい!)。良くも悪くも同級生同士助け合い、解剖・ポリクリ・卒試・国試など6年間を

乗り越えたという一体感が20年以上たっても感じられるのが不思議でした。今では、企業家のようになった人もいれば、世界の第一線で活躍する人もいます。大学でacademicに残り続ける厳しさもあるでしょうし、実際の患者さんを前に、医師として体力的にも精神的にも限界とを感じるまで働く難しさもあるでしょう。年齢的に、人生の分岐点にさしかかっている人が多いのかもしれませんが。今後について同級生に相談する姿もみられました。みな、「やっぱり同級生は頼りになる！」と口にしていました。最後には応援団だった大島君の掛け声で、池田君の今後の健闘を祈ってエールを送り、円陣を組んで学生歌「山脈さやかに」を歌って一次会をしめました。二次会も高崎市内で多くの参加をえて12時ごろまで思い出話を花をさかせ、三次会はどこに行ったのか…。氣勢をあげる背中を見送り、こどもが寝て待つ家に帰りました。後日談ですが、同窓会の翌週火曜日には、第一病理の横尾君がクラスから3人目の母校の教授に内定しました。大島君がすぐにfacebookにのせ、皆で喜びを分かち合いました。おめでたいこと続きで嬉しいかぎりです。春になったらまたすぐにお祝いかな？平成4年卒、これからも皆でがんばりましょう！



平成4年卒クラス会 (平成25年11月16日 高崎メトロポリタンホテル)

平成2年卒(1990年卒) (第3回・第2回)同窓会のご報告

磯 達也 (平2卒)

第3回

2013年11月30日(土)、平成2年卒の同窓会が高崎メトロポリタンホテルで開催されました。卒業23年、7年ぶり3回目の同窓会で、参加者は一次会57名でした。遠く山口から駆けつけてくれた岸博子先生の乾杯で開会しました。わずか2時間の中で(一人当たり1~2分)で、それまでの20年余りの人生を語りつくせるはずもなく、それでいて一人一人が機知にとんだ自己紹介をして、会は大いに盛り上がりました。高崎東口のサンフラワーで行われた二次会にも45名が参加しました。三次会まで参加したメンバーは12名、午前2時まで語り合いました。一瞬にして学生時代に戻れた幸せなひと時でした。皆それぞれ、自分のフィールドで大活躍中で、たくさんの元気をもらいました。いい顔していました。撮影した写真の一部がFacebookの「90卒」グ

ループにアップロードされ、同窓会の余韻をしばらく楽しめました。Facebookを通して、今回参加できなかった同級生も同窓会の雰囲気を楽しめたようです。

(幹事：磯達也、伊藤克彦、小原沢昌子、柿崎暁、小中和子、角野博之、筒井貴朗、原和比古、藤田尚、山岸敏治)

第2回

2006年6月10日(土)、伊香保温泉の森秋旅館にて開催されました。7年前も62名もの同級生が集い、盛大な会になりました。参加者は以下の通りです。石嶋、磯、荻原、桜井繁、土尾、山口、吉田正、蛭川浩、井野、山中、羽鳥、石塚、伊藤克、伊藤一、伊東充、北原、神保、橋本、井出、筒井、岡本、藤田、岡田、岡野、柿崎、笠間、加藤、壁谷、鈴木秀、中村和、三輪、山田拓、吉田誠、五十嵐、大岩、高橋、武内、中村学、堀越、角野、青柳、池田、太田吉、太田里、小原沢、蛭川純、三宅、岸、小中、竹越、原、宮内、山田敬、山岸、生方、比島、篠原、半田、成清、桜井信、吉田敏、荻野。(幹事：磯達也、伊藤克彦、荻野隆史、柿崎暁、小中和子、角野博之、樋口博、山岸敏治)



第3回 平成2年卒同窓会 (平成25年11月30日 高崎メトロポリタンホテル)

最後列左より：北原、石嶋、比島、荻野、神保、羽鳥、山田(拓)、野本、大岩
五列目左より：櫻井(繁)、青柳、半田、山田(敬)、竹越、山岸、壁谷、成瀬、小川
四列目左より：木村、池田、櫻井(篤)、伊藤(克)、石塚、佐々木、篠原、佐野
三列目左より：生方、根岸、岡田、土尾、中村(和)、荻原、櫻井(信)、高橋(一)、吉田(誠)
二列目左より：吉田(正)、平野、武内、岡本、伊東(充)、角野、平井、井野、磯、折井、五十嵐
前列左より：山口、原、筒井、伊藤(一)、笠間、柿崎、石川、岸、太田(里)、小原沢、小中

健康支援総合センターの 紹介並びに就任のご挨拶

群馬大学大学教育・学生支援機構
健康支援総合センター

教授 竹内 一夫 (昭60卒)



平成25年4月1日付けで群馬大学大学教育・学生支援機構健康支援総合センター教授を拝命し、またこのたび平成26年4月1日付けで同・副センター長を拝命いたしました。同窓会のご高配により、このような場をお借りして、健康支援総合センター(センター長・石川治理事・副学長)の紹介を兼ねて皆様にご挨拶を申し上げる機会をいただきましたことに深くお礼を申し上げます。

私は学部卒業後(昭和60年)、鈴木庄亮名誉教授が主宰されていた公衆衛生学教室の博士課程へと進みました。思春期精神保健のための新たな質問票の開発が博士論文のテーマでした。教室の先輩には現在の小山洋教授、青木繁伸・群馬大学社会情報学部教授、小川正行・群馬大学教育学部教授がおられて、まさしく多士済々、厳しくも温かなご指導をいただくことができました。

博士課程修了後、University of Texas Health Science Center at Houston School of Public Healthにて、当初はVisiting Fellowとして、後に修士課程(M.P.H.)の院生として、2年間ほどRobert E. Roberts教授(社会精神医学)のご指導を受け、家族同様のお付き合いをさせていただけたことも大変な幸運でございました。

帰国後、群馬大学にて日本学術振興会のポス・ドク、助手、講師を務めさせていただき、その後県内の看護系、福祉系の大学勤務を経て、埼玉大学教育学部学校保健学講座に6年間ほど在籍した後、昨春母校へ戻りました。前橋生まれ前橋育ちの私にとりましては、30年以上かけて、双六の振り出しに戻ってきたような気が致します。

また、大学院時代に臨床研修を受けさせていただいたことがきっかけとなり、群馬大学神経精神医学教室の町山幸輝名誉教授、三國雅彦名誉教授、さらに現在の福田正人教授のご厚誼を得て、臨床面でのさまざまなご指導・ご後援を得られたことも幸運でした。さらに、私の父がやはり同窓生であり小児科学教室出身というご縁から森川昭廣名誉教授、現在の荒川浩一教授よりのご厚誼を得て、重要な成果を挙げた川崎病研究班に参加させていただいたことも

重ねての幸運であったかと存じます。

私の現在おります健康支援総合センターについてご紹介いたします。平成18年に従来の保健管理センターから改組され、大学教育・学生支援機構の一部として位置づけられた組織です。本年3月に退任された大島喜八名誉教授の20年にわたるご尽力の結果、学生の健康診断や保健指導に関する諸業務は、ほぼ余すところなくシステム化され、効率的・合理的に運営されております。今春、後任の内科系医師として公衆衛生学教室大学院の後輩に当たる宮崎博子講師を迎えることが出来ましたので、両輪としてさらなる発展に寄与していきたいと存じます。

メンタルヘルス部門においては、まずスクリーニングとして健康診断時に新入生・在校生全員を対象に問診表が配布され、テキサス大学方式をベースにしたメンタルヘルスチェック基準に該当する学生には呼び出しをかけ、複数の精神科医師による2次面接を行っております。その後、カウンセリングを必要とする、あるいは希望する学生には、精神科医師によるメンタルヘルス相談の他に、荒牧地区・昭和地区・桐生太田地区のそれぞれのキャンパスにおいて非常勤のカウンセラー(臨床心理士)によるカウンセリングを予約制で実施しています。また、桐生太田地区においてはソーシャルワーカーによるアウトリーチ型の支援も行っております。

昨年赴任早々、反復する自傷行為や希死念慮等を伴ったいわゆる困難事例に次々と遭遇することとなり、こうした学生に対して大学生活を維持させる支援をすることの難しさを痛感いたしました。

その一方で、現時点ではより軽症ではあるものの早期発見・早期介入が必要と思われる潜在的なうつ病・自殺ハイリスク群への構造的な対策も待たないとなっております。自身の専門分野でもあります予防プログラムを今後どのように学内で応用したらよいか、無い知恵を振り絞る日が続いております。

また、いまやトピックともいえるべき発達障害を背後に持つ学生の対処についても、障害学生支援室との共催で、すでにシンポジウムや情報交換会を開始しております。

中期的には教職員を含めた包括的なメンタルヘルスケア体制を全学的に構築することが望まれており、総数約7,400名の大所帯に対して限られたマンパワーでどのように進めていくのがよいのか、模索して行きたいと思っております。

末尾となりましたが、今後とも何卒よろしく健康支援総合センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学会報告（同窓会補助）**第20回外科侵襲と
サイトカイン研究会を開催して**

臓器病態外科学

教授 **竹吉 泉**（昭57卒）

2013年12月14日（土）に伊香保温泉 雨情の湯森秋旅館で第20回外科侵襲とサイトカイン研究会を盛会裏に開催できましたことをご報告いたします。

本研究会は‘外科侵襲学に関する基礎的および臨床的研究成果を発表し、会員相互の研鑽と親睦を図る’ことを目的に設立された研究会であります。最近では外科手術のみならず、外傷・感染症・敗血症やショックなど過大侵襲反応の制御や原因解明を目指す研究会へと発展しております。従って、今回は外科のみでなく、麻酔科や救急、集中治療や感染、そして泌尿器科など幅広い分野の先生方に演題をいただきました。研究会当日は多方面の先生方にお集まりいただき、研究成果を発表していただき、さらに活発な討論をしていただき実りある会であったと思います。今回は第20回という節目の開催でもありましたので、日本の侵襲学の大家であり、本研究会の名誉会員である大阪市立貝塚病院総長の小川道雄先生に『侵襲学前史』のタイトルで、侵襲学が医学の一分野となる以前の時代を近代外科学の先駆者の足跡から教育講演をしていただきました。

また、ランチョンセミナーとして、兵庫医科大学救急・災害医学講座教授の小谷穰治先生に『阪神淡路大震災とJR福知山線脱線事故と東日本大震災—被災者・医療者の立場で経験して思う大切なこと—』のタイトルで、災害の実体験を通して思う大切なことを講演していただきました。

研究会前日には、幹事会、世話人会を開き、その後の全員懇親会では温泉宿の畳上で互いに浴衣で膝を突き合わせ、研究や医療について大家と呼ばれる先生方から若い大学院生まで大いに議論し、懇親を深めました。

最後に、本研究会を開催するにあたり、群馬大学医学部同窓会からご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

学会報告（同窓会補助）**第328回日本消化器病学会
関東支部例会**

保健学研究科

教授 **長嶺 竹明**（昭51卒）

第328回日本消化器病学会関東支部例会は2月22日、海員会館（東京）で、320名の参加者を得て開催されました。開催日の決定は約1年前であり、2月22日にした理由の1つはぞろ目で覚えやすいことでした。ところで、2月8日、15日と2週間連続して降った大雪のことを鑑みると、「天も味方してくださった」と安堵して、開会を迎えた次第です。

支部例会では、研修医セミナー演題26題、専修医セミナー演題26題、一般演題30題の合計82演題が発表されました。研修医セミナーおよび専修医セミナーから優秀な4演題に対して奨励賞が授与されるため、各演者とも発表方法に創意工夫がみられました。専修医セミナーでは群馬大学関連の2演題が奨励賞として表彰されました。ランチョンセミナーでは、埼玉医科大学総合医療センター消化管一般外科・持木彫人教授から「胃癌に対する低侵襲治療と胃切除後の消化管機能障害」についてご講演を賜りました。桑野博行教授（病態総合外科学）には座長の労をお取りいただきました。

また、特別講演では、自治医科大学医学部 感染・免疫講座ウイルス学部門 岡本宏明教授から、「E型肝炎ウイルスの基礎的、臨床的研究」についてご講演を賜りました。E型肝炎は群馬県のイノシでも高頻度に感染しており、Common Diseaseであることを再認識しました。

本例会終了後、第6回専門医セミナーが開催されました。胃疾患症例を提示し、診断から治療に至る過程を、アンサーパットを使用して、参加者と討論する形式で進行了。また炎症性大腸疾患を巡る日常臨床の諸問題に関する質問をして、専門家と非専門家に分けて答えを判別し、両者の違いを明らかにする試みは好評でした。

最後に、支部例会を開催するに当り、同窓会からご援助を頂戴いたしまして、心より御礼申し上げます。

群大養心寮での生活

東 杏莉 (医学科6年)



前号で、小山教授の養心寮時代の記事を楽しく拝見させていただきました。小山教授の時代も楽しそうだなあと思っていたところ、私の方に、現在の養心寮について、書いてほしいとの依頼があり、ありがたくお受けしました。

2008年3月末、初めて養心寮を見た感想を私なりに柔らかく表現しますと、こんなところにうら若き女子大生を住まわせる気か、といったところでしょうか。見た目はただただ古く、部屋については、天井にボイラー用のパイプが張り巡らされており、ロフトとは名ばかりの木の棚があるだけでした。

住めば都という言葉がありますが、ここは例外に違いないなんて思ったりもしていました。また、管理人室に4月分の水光熱費、入寮費などを入寮当日に納めに行くのですが、中には、怖い顔をした寮長、副寮長、会計委員長がおりまして、部屋の入り方、挨拶の仕方などを厳しく注意され、寮の規則について細かく説明され、もうすっかり意気消沈でした。その夜、私は何も無い寮の個室で、ひとり静かに泣いてしまいました。

小山教授の時代と変わらず、私たちも、入寮してすぐに、対面式がありました。一人ずつ大きな声で返事をし、部屋番号、学部学科、名前、の順に正確に言い、抱負を一言述べます。最後に、先輩方と向かい合い、全員で寮歌を歌います。歌声が小さい場合はやり直しもさせられました。男子寮生は対面式で独特な返事の仕方や寮歌の歌い方を習うらしく、のちに行われる入寮式で披露されたそれらには度肝を抜かれました。また、はんこもらいという行事も残っていて、約2か月の期間で、一人ひとりの先輩方の部屋を訪ね、自己紹介をしつつ親睦を深め、はんこを収集します。

現在の養心寮では、食堂は存在せず、各階に補食室という名の台所があります。そこで、学年を問わず、自由に食事を作ったり、食べたり、談笑したりします。自分の食べ物にはきちんと名前を書くことを徹底し、書いてない場合は皆のものになってしまいます。時々ある、できたての料理やお菓子のお裾分けにより、より一層寮生同士の親睦が深まるように感じました。

現在の寮の個室は、全室エアコン完備ですが、そうなったのはつい2年ほど前です。それまでは、夏季は扇風機、冬季は部屋に備え付けられた夜6時から10時までしか起動しないボイラーにより、寮生は暑さ寒さに耐えていました。卒寮した先輩方の遺産であったり自ら購入したりしたウインドファンがある部屋の住人は夏の間人気者になり、常にその寮生の部屋には本人以外も含め誰かしらがいました。

最初の4年間は医学科の先輩方、他学部や他学科の同学の寮生などがいて、新歓行事、七夕祭、廃品回収、町内清掃、寮祭、餅つき、追いコンなどの寮行事にもかろうじて参加していましたが、5・6年目はすっかり幽霊寮生と化していました。そんな時でも、毎年、祭りの時期になると、寮の玄関に立て看板が飾られたり、笹飾りが立てられたりと、後輩たちにより、寮での季節の移り変わりをしっかりと感じる事ができたので幸せでした。また、同じ階に住む後輩たちは学部学科に関係なく、私を慕ってくれていたのも、私が寮で6年間暮らし切ることができた要因だと思えます。

私以後、女子の医学科の寮生は、4学年下まで現れずとても寂しかったです。後輩たちにはあまりその寂しさを感じてほしくありません。養心寮は確かに古く、しがらみも多く煩わしく感じてしまう点もあるかもしれませんが、それ以上に楽しいこと、嬉しいことで溢れています。私自身、6年間なんだかんだありましたが、やはり、住めば都という言葉は正しかったと実感しています。

現在の養心寮は、学務の方々、地域住民の方々の支えで成り立っています。寮行事の見直しも行われており、私が6年間暮らした時の養心寮ではなくなるかもしれません。それでも、養心寮はその名の通り、群大生の心を養っていくことに変わりはないと思います。これからも、少なくとも絶えず医学科の学生が養心寮に生き続けることを願います。



補食室 (共用空間の一つ。料理を作ったり、食べたり、おしゃべりをする場所)

防災と医療の在り方を 考える講演会の報告

群馬大学医学部同窓会・
刀城クラブ会長

教授 飯野 佑一 (昭46卒)



防災と医療の在り方を考える講演会が平成25(2013)年11月9日(土)午後1時30分より、刀城会館において行われました。群馬大学には理工学部、教育学部、社会情報学部、医学部と4つの学部があります。それぞれの学部に同窓会があり幅広く活動を行っています。しかしながら、群馬大学という大局的な立場に立って連携することはなかったように思います。これからは横のつながりを強めてゆきましよう、お互い連携してゆきましよう、まずはできることからやってゆきましようとの事で機運が高まり今回の講演会の実現に至ったわけでありませう。

いまや、世界中いたるところで人々は自然災害の脅威にさらされています。日本でも地震、台風、洪水、土砂災害など後を絶ちません。このような背景を踏まえて今回の講演会の主題を決めさせていただいたわけでございます。当日は土曜日の午後という貴重な時間帯にもかかわらず、約100名の同窓生や

市民が参加してくださいました。2題の講演について印象深かった点を述べてみたいと思います。

講演Ⅰでは、群馬大学理工学部研究院の片田敏孝教授が「想定を超える災害にどう備えるか」と題して講演しました。東日本大震災前から防災教育に取り組んでこられた岩手県釜石市の小中学校の事例を紹介し、自発的に逃げる行動ができる子供を育てる事が大切と述べました。そして、世代間で意識を共有することが重要であり、10年、20年後に子供たちへの防災教育が成果を上げるであろうと強調しました。

講演Ⅱでは、県立小児医療センター第二内科の丸山憲一郎部長が「災害時の小児医療」と題して講演しました。特に災害時に母乳がいろいろな面で威力を発揮する事を強調したことが印象的でした。

長時間にわたる講演会でしたが、時機を得た内容であったためか、参加者全員が最後まで熱心に講演を聞かれていました。工業会、刀城クラブを中心に4学部の同窓会が連携して開いた初めての講演会でしたが成功裏に終わることができました。当日、上毛新聞の取材もあり、翌日の朝刊に講演会の様子と各学部同窓会の連携による講演会開催の主旨が掲載されました。今後、各学部同窓会の益々の交流と社会貢献の双方を視野に入れていろいろな行事が企画されることを期待しています。



防災と医療の在り方を考える講演会 (平成25年11月9日 刀城会館)

医学部代表者及び 新任教授との懇談会報告

同窓会・刀城クラブ

幹事長 白倉 賢二 (昭50卒)

平成26年2月7日、恒例の刀城クラブ主催平成25年度医学部代表者及び新任教授との懇談会が石井記念ホールにおいて開催されました。本年度の新任教授は神経精神医学分野・福田正人教授、病態制御内科学分野(旧内科学第1講座)・山田正信教授、脳神経内科学分野・池田佳生教授、がん治療臨床開発学(創設寄付講座)・浅尾高行教授、病態病理学分野(旧病理学第1講座)・横尾英明教授の5名です。大学からは高田学長、和泉研究科長、野島病院長、小山徹也教務委員長・同窓会副会長、同窓会からは飯野会長、饗場元会長・元財団理事長、山中元会長・前財団理事長、梅枝副会長、西松副会長、白倉幹事長・財団常務理事、成瀬同窓会事務長、望月財団事務局長が参加しました。5人の新任教授のうち池田佳生先生は岡山大からの赴任ですが、もともとは前橋で生まれて本学の神経内科のご出身で他の4人の先生方も本学の准教授からの昇進ということで大変和やかにくつろいだ雰囲気の中に会は進行しました。5人の新教授は各教室での抱負を語って

いただきました。学長、研究科長、附属病院長からのご挨拶からは現在の大学改革の中で大学が大きな変革と試練の中にあることがうかがわれました。同窓会側からは同窓会活動の活性化の取り組みについて話題が提供されました。本来同窓会は卒業生や母校の発展に寄与するのが目的ですが、饗場元会長からは同窓会員名簿に掲載不同意による空白が多くみられること、平成16年度以降の学年クラス幹事の選出がないこと、支部幹事の欠員が多いことが活動を妨げ、同窓会の格式をおとめているとの話をされました。和泉研究科長からも本学で学んだ卒業生は大学だけでなく日本の財産であり、これを生かすことは同窓会のみならず群馬大学の使命でもあるとお言葉を頂きました。同窓会としては和泉研究科長のご協力を得て、今後も大学および卒業生に働きかけて同窓会活動の活性化を図らなければならないとの使命が託されました。また、2013年が医学部創立70周年に当たることから記念誌の編集が行われており、本年度中に発行が予定されていることが話題になりました。70周年記念誌は同窓生の希望者には有料で配布される予定になっております。会の終わりには昨年からの同窓会の事務長に就任した成瀬氏の音頭による関東の一本締めにてお開きとなりました。5人の新教授にはますますのご活躍をお祈りいたします。



医学部代表者及び新任教授との懇談会 (平成26年2月7日 石井記念ホール)

月岡関夫先生群馬県医師会会長 就任祝賀会

医学部同窓会・刀城クラブ

会長 飯野 佑一 (昭46卒)



皆さん、本日はお忙しい中月岡関夫先生群馬県医師会会長就任祝賀会に多数ご出席下さいまして誠にありがとうございます。「月岡先生、このたびは群馬県医師会会長ご就任おめでとうございます。」先生は平成25年11月に群馬県医師会会長に就任されました。群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ同窓生として初めて群馬県医師会会長が誕生したわけでございます。長きにわたる群馬県医師会理事として、また群馬県医師会副会長としての先生のご功績が評価されたことと先生の御人徳によるものと思えます。誠に名誉なことと存じます。

ここで先生のご略歴を簡単に紹介させていただきます。先生は昭和40年に群馬大学医学部を卒業されました。昭和41年に群馬大学医学部第一内科(七条内科)に入局され、同時に群馬大学大学院に入られました。昭和45年大学院卒業後、原町赤十字病院検査部長として勤務されました。2年後の昭和47年に群馬大学にもどられ、昭和48年に高崎市岩鼻町で開業されました。その後、昭和60年高崎市医師会理事、平成7年群馬県医師会理事、平成17年群馬県医師会副会長を歴任され、平成25年11月群馬県医師会会長に就任されました。先生がこのような群馬県医師会会長に就任されましたのも群馬県医師会理事、副会長として活躍され手腕を発揮されましたことは勿論のこと、先生の終始一貫した真摯な態度、姿勢が多くの方々共感を呼んだものと確信しています。

先生のご健勝と今後益々のご活躍を祈念いたしまして誠に簡単ではありますがお祝いの言葉に代えさせ

ていただきます。このたびは誠にめでとうございました。

平成26年3月28日午後7時より刀城会館において白倉幹事長の司会で祝賀会が行われました。参加者総勢44名、同窓会長の挨拶の後、来賓の和泉医学部長、野島病院長、西松県医師会理事(同窓会副会長)よりお祝辞をいただきました。次いで森川前同窓会会長より月岡先生に対して記念品(広辞苑)が贈られました。記念品の広辞苑は月岡先生ご自身が希望された品であり、先生の勤勉さを象徴するものでした。梅枝同窓会副会長のご発声で乾杯が行われ、和やかな祝宴が始まりました。同窓会顧問(元同窓会会長)の饗場先生、月岡先生の同級生である小川 龍先生(日本医科大学名誉教授)からもお祝辞をいただきました。どなたも月岡先生のお人柄と真摯な態度についてお祝辞の中で称賛されておられました。そして最後は小林 功群馬パース大学学長(群馬大学名誉教授)より締めのご挨拶をいただき、小林 功先生より指名を受けた飯野会長が万歳10連発で締めくくりました。久々に盛り上がった祝賀会となりました。

なお、今回の祝賀会開催に関しまして、開催時期も含め、準備の都合上群馬県内の同窓会役員、群馬大学医学部教授、群馬県医師会の一部、県内を中心とした月岡先生の同級生の方々のみ案内状を限らせていただきましたことをお許し願いたいと思えます。



月岡関夫先生群馬県医師会会長就任祝賀会 (平成26年3月28日 刀城会館)

財団のページ

新しく始まった 講師派遣事業

財団常務理事

白倉 賢二 (昭50卒)



群馬健康医学振興会の3つの公益事業である書籍発行、研究助成、講師派遣のうち、講師派遣事業については財団役員の自主的活動として講演実績を財団事業報告で毎年報告して参りました。平成25年度からはこの活動を強化して、財団が地域の団体から依頼を受けて同窓会関係者から講師を斡旋する事業を開始しました。これに基づいて地元の昭和町3丁目自治会から講師派遣を依頼され、附属病院リハビリテーション部の白倉(昭和50年卒)が平成25年11月30日「3丁目ふれあい健康サロン」に派遣されました。会は明和短期大学で開催され地元の皆様50名ほどが集まり「高齢者向け健康講話」と題して講演を行いました。ふれあいサロンの活動は前橋市の福祉団体が後援しているもので市内各地で地域貢献事業として行われており、今回は上毛新聞でも取り上げられました。この新しい方式での講師派遣事業をネット上で広報し、財団の公益性をさらに高めて平成27年度に予定されている公益法人への移行に向けて活性化したいと考えております。



椅子を使った運動に取り組む参加者

手軽な運動で健康に 前橋

お年寄りが幅広い知識を学ぶ前橋市昭和町の「昭和町ふれあいサロン」が同市の明和学園短大で開かれ、50人が手軽にできる運動を実践した。参加者は同短大の永井真紀講師らと共に、椅子を使った運動に挑戦した。椅子の背もたれにつかまって片足立ちするなど、学生から丁寧な指導を受けながら、それぞれのペースで体を動かした。群馬大医学部附属病院リハビリテーション部。サロンは地域のお年寄りに防犯や健康づくりの知識を学んでもらおうと本年度始まった。

上毛新聞 平成25年12月10日掲載

一般財団法人 群馬健康医学振興会 賛助会 (個人、法人) ご入会報告

一般財団法人群馬健康医学振興会では、平成25年度より賛助会員のご入会をお願いしています。

目的として、科学的な健康づくりのための調査研究を行い、その成果を健康づくりの実践にいかし、県民の健康増進の活動を支援することとしています。

ここにご賛同いただきました個人会員様、法人会員様の一覧を掲載させていただくとともに、今後益々発展していくことを念頭に、御礼の言葉とさせていただきます。

賛助会ご入会者一覧

【個人会員】

五十音順 (敬称略)

饗場 庄一・飯野 佑一・五十嵐佳子・牛島 義雄

梅枝 定則・金子 達夫・白倉 賢二・鈴木 庄亮
 中川 隆雄・永井伊津夫・奈良 純夫・乃木 道男
 根本 俊和・福田 利夫・望月 教弘・森川 昭廣
 柳川 洋子・山田 邦子・山中 英壽・横江 隆夫
 以上20名

【法人会員】

受付順

公立藤岡総合病院・公立富岡総合病院・藤岡市国民健康保険鬼石病院・公立七日市病院・桐生厚生総合病院・株式会社 北栄・税理士法人 思惟の樹事務所・公益財団法人 老年病研究所・医療法人 真木会 真木病院・医療法人社団美心会 黒沢病院・医療法人社団 東郷会 恵愛堂病院・利根保健生活協同組合 利根中央病院・前橋赤十字病院・群馬県済生会前橋病院・社会保険 群馬中央総合病院・原町赤十字病院・医療法人 一羊会 上武呼吸器科内科病院

以上17団体

群馬大学が WHO Collaborating Centre に指定されました

保健学研究科長、
医学部保健学科長

渡邊 秀臣 (昭54卒)



平成25年7月22日付けをもって群馬大学は、世界保健機関（WHO）より正式な協力センター（WHO Collaborating Centre: WHO CC）に指定されました。認可されたWHO CCの正式名称は「WHO Collaborating Centre for Research and Training on Interprofessional Education」（URL 1）です。お気づきのように、1997年に群馬大学保健学科が創立以来継続してまいりましたチーム医療教育（IPE）がこの活動の対象となり、今後WHOと協力して「チーム医療教育の研究と研修」を行います。このチーム医療教育は医学科の教務部会のご協力平成20年より医学科の学生も参加する医学部の取組となっています。現在、日本国内でWHO CCの認定を受けているのは27機関31施設です。その中で大学は12大学（内、国立大学は6校）ですが、保健人材育成部門でのWHO CCは国内唯一のもので

す。WHO CC申請には、4年間の連携活動実績が求められますが、最初にWHOの本部に訪問したのは2008年12月です。この橋渡しをしてくれたのが、現在浜松市で内科を開業されている安川隆子先生（昭和57年医学科卒）です。先生は9年間WHO本部で勤められ、その時からの太いパイプで私たちの活動の糸口を作っていただきました。以来、安川先生のご指導の基に、ジュネーブのWHO本部からスタッフを招聘し、また訪問して共同活動を発展させま

した。一方、日本が所属するWHO地域事務局 Western Pacific Regional Office (WHO/WPRO)がフィリピンのマニラにあり、こちらとは2010年より交流を始めて2013年のCollaborating Centre認定に至っています。

これまでの共同活動の成果として、WHOから昨年11月に21世紀に向けた保健職教育ガイドライン WHO Education Guidelines 2013 (URL 2) が発行されました。医師を含めた全ての保健職教育のガイドラインです。ガイドラインは多職種連携教育を推奨し、専門知識・技術を高めて専門職の質を維持しながら職種間の連携を強化する教育を明記しています。群馬大学の多職種連携教育は、WHOの教育ガイドラインのプロモーションビデオ（YouTube, URL 3）でも活躍しています。

WHO CCの第一期4年間の活動は、1) IPE促進のためのシンポジウムの参加と開催、2) IPEの効果の検証研究、3) アジア地域でのIPE研修の実施、です。その実行組織として「群馬大学多職種連携教育研究研修センター」が学長直属のセンターとして設置され、新聞紙上でも報道されました。本WHOとの交流には教員、学生のWHOでの研修が積極的に推し進められ、これまでに4名の保健学研究科の助教が研修し、7名の保健学科の学生がWHOを訪れています。医学科の皆様にもこの機会を是非ご利用いただき、群馬大学のグローバル化に寄与できれば幸いです。

刀城クラブの皆様には今後ともご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

URL1: http://apps.who.int/whocc/Detail.aspx?cc_ref=JPN-89&cc_ref=jpn-89&

URL 2: <http://whoeducationguidelines.org/>

URL 3: http://www.youtube.com/watch?v=rhzJYR_EI2M



多職種連携教育研究研修センター運営委員

同窓会財政基盤強化 協賛金の報告

財務委員長 梅枝 定則 (昭46卒)

「同窓会財政基盤強化協賛金」で協力の最後のお願いを昨年末にいたしましたところ、会員612名また法人等5件から合計13,071,000円の協賛金をい

ただきました(平成26年3月31日現在)。心より御礼を申し上げます。

今後、協賛金のお願いはいたしません。協賛いただきました会員数、金額は逐次ご報告させていただきます。

皆様にとって良い一年でありますよう祈念しております。

同窓会財政基盤強化ご賛同者一覧 (平成25年12月25日～平成26年3月31日までのご賛同者)

卒年	ご芳名(敬称略)	卒年	ご芳名(敬称略)	卒年	ご芳名(敬称略)	卒年	ご芳名(敬称略)
昭24卒	大原 義雄	昭39卒	内田 好司	昭50卒	草島 義徳	昭60卒	鯉淵 典之
昭25卒	松島 敏	"	川崎 恒雄	"	佐藤都留雄	"	菅又 徳孝
昭28卒	間坂 宏	"	村本 卓郎	"	須永 吉信	昭61卒	新井 正明
"	矢野 亨	昭40卒	阿部 政雄	"	多和田 健	"	江澤 一浩
昭30卒	小原澤 孚	"	吉住 幸子	昭51卒	飯田 裕	"	齋藤 繁
"	吉野 輝恒	昭41卒	石黒 早苗	"	岸 章治	"	長瀬 慈村
昭33卒	小林 暉佳	"	川上 憲一	"	柳田 通	"	堀口 淳
"	桜井 章吾	"	佐藤 英子	昭52卒	浅見 正和	昭62卒	森 圭介
"	塚田 穰	"	佐藤 俣也	"	梅枝 愛郎	平1卒	中野 勝也
"	中山 欣司	"	新開 紘子	"	大澤 英夫	平3卒	高尾 昌明
"	松岡 正紀	昭42卒	岡田 慶一	昭53卒	上里 博	平4卒	飯塚 伯
"	水野 武昭	"	長岡 成郎	"	草野 元康	"	岡部 聡寛
"	宮田 敬一	"	中林 公正	"	清水 宏之	"	樋口 徹也
昭34卒	安齋 徹男	"	中尾 紘	"	早川 和重	"	横濱 章彦
"	五十嵐俊弥	昭45卒	今井 干美	"	山田 清彦	平5卒	野村 道子
"	大木 一郎	"	菅野 拓勇	昭54卒	浦部 延子	平6卒	前川 出
"	乃木 道男	昭46卒	神尾 進之	"	鈴木 孝憲	平10卒	岩崎 明美
昭35卒	菅野 雄行	"	清水 庸夫	"	中野 隆史	"	尾崎 さおり
"	鈴木 晴夫	"	富岡 眞一	昭55卒	安里 文雄	平15卒	大澤 貴志
昭36卒	石川 大二	昭47卒	内山 安男	昭56卒	瀧口 道生	平16卒	江森 一雅
"	萩野 晃一	"	田口 修之	"	多田 博行	平18卒	鈴木 晶子
"	鈴木 玄一	昭48卒	金子 裕	"	藤田 欣一	平19卒	高橋 正洋
"	吉住 登	"	柘植 和郎	昭57卒	朝倉 健	平23卒	山上 洋介
昭37卒	川島柳太郎	"	丸山 明信	昭58卒	青柳 秀忠	院 4	飯島 久香
"	小林 敏男	昭49卒	本間 哲夫	"	志賀 達哉	名誉会員	成清 卓二
"	小山 善朗	"	宮城 修	"	境野 博久	特別会員	高岸 憲二
昭38卒	川辺志津子	"	村澤 賢一	昭59卒	勝浦 誉介	特別会員	福田 正人
"	鈴木 斌	"	矢崎 克己	"	寺内 正紀		
"	松崎 茂	昭50卒	北畠 雅人	"	蒔田益次郎		

役員会だより

第11回役員会 (平成25年12月19日)

出席者 飯野会長 他13名 学友会2名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 医学部代表者及び新任教授との懇談会について
3. 平成25年度退任教授記念送別会について
4. 財政基盤強化協賛金について
5. その他

協議事項

1. 交換留学生奨学補助金について
2. 英国大学医学部における臨床実習のための短期留学について
3. 学術集会補助金について

4. パジャジャラン大学との交換交流学生歓迎会に伴う援助について

5. 会報編集状況について

6. その他

- 1) 広報委員会について

- 2) 医学系研究科70年史について

第1回役員会 (平成26年1月23日)

出席者 飯野会長 他16名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 月岡先生群馬県医師会会長就任祝賀会について
3. 財政基盤強化協賛金について
4. 埼玉県支部総会について
5. 伊勢崎佐波支部総会について
6. 4学部同窓会情報交換会について

7. その他

協議事項

- 1. 平成25年度卒業生に対する記念品について
- 2. 卒業時同窓会表彰学生の選考について
- 3. 会報編集状況について
- 4. 就学援助について
- 5. その他

第2回役員会 (平成26年2月27日)

出席者 飯野会長 他18名 学友会4名

報告事項

- 1. 法人のその後の活動について
- 2. 医学部代表者及び新任教授との懇談会について
- 3. 退任教授記念送別会について
- 4. 群馬大学各学部同窓会関係者による情報交換会について
- 5. 財政基盤強化協賛金について
- 6. その他
 - 1) 月岡先生群馬県医師会会長就任祝賀会について
 - 2) 学友会新旧役員あいさつ
 - 3) その他

協議事項

- 1. 平成26年度新入生歓迎行事について
- 2. 学術集会補助金について
- 3. 会報編集状況について
- 4. その他
 - 1) 役員 の 辞 退 について
 - 2) 基礎講堂落成記念式典について

第3回役員会 (平成26年3月27日)

出席者 飯野会長 他16名 学友会1名

報告事項

- 1. 法人のその後の活動について
 - 2. 椎原教授退任教授記念送別会について
 - 3. 新入生オリエンテーションについて
 - 4. 東京支部総会について
 - 5. 財政基盤強化協賛金について
 - 6. その他
- 協議事項
- 1. 医学部70年史について
 - 2. 会報編集状況について
 - 3. その他



【採用】平成26年4月1日

和田 直樹 (平7年) リハビリテーション医学講師

【昇任】平成26年1月1日

前嶋 明人 (平6卒) 医学系研究科教育研究支援センター医療開発医科学部門准教授

磯 達也 (平2卒) 医学系研究科教育研究支援センター医療開発医科学部門准教授

平成26年2月1日

小林 勉 (平4卒) 附属病院整形外科講師

平成26年4月1日

山下 宗一 (平12卒) 周産母子センター講師



【昇任】平成25年7月1日

森 圭介 (昭62卒) 埼玉医科大学眼科学教授

謹告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員

- 昭和25年卒 角田 志朗先生 (平成25年1月15日逝去)
- 昭和61年卒 大江 正恵先生 (平成25年7月2日逝去)
- 昭和43年卒 柳町 靖夫先生 (平成25年8月2日逝去)
- 昭和33年卒 安戸 一皓先生 (平成25年11月3日逝去)
- 昭和29年卒 行野 外雄先生 (平成25年11月27日逝去)
- 昭和23年卒 永谷 刀禰先生 (平成25年12月3日逝去)
- 昭和33年卒 藤田俊太郎先生 (平成25年12月8日逝去)
- 昭和50年卒 有馬 端先生 (平成25年12月8日逝去)
- 昭和37年卒 小山 善朗先生 (平成25年12月10日逝去)
- 昭和37年卒 伊藤 善一先生 (平成26年1月3日逝去)
- 昭和25年卒 高橋 文典先生 (平成26年1月15日逝去)
- 平成25年卒 鎌田 洋輔先生 (平成26年1月17日逝去)
- 昭和33年卒 青木 謙二先生 (平成26年1月23日逝去)
- 昭和33年卒 田中 英雄先生 (平成26年2月1日逝去)
- 昭和28年卒 小林 直人先生 (平成26年2月15日逝去)
- 昭和34年卒 高澤 勝英先生 (平成26年3月29日逝去)
- 昭和29年卒 服部 光雄先生 (逝去)

編集後記

刀城クラブのみなさん、こんにちは。学生編集委員を務めさせて頂いております医学科4年の小尾紀翔と申します。桜も満開を迎え、景色も空気も本格的に春めいてきた4月はじめのことです。皆さんもご存知の石井ホールで食事をしようと思い、食券を購入したところ、おつりがいつもと違うことに気付きました。何事かと思って値段を見てみると、いつもの値段と変わっていました。まさにこの時が、消費税が5%から8%に上がったことを実感した時でした。みなさんにも増税を感じたときがそれぞれあったのではないのでしょうか。

変わったのは消費税だけでなく、基礎大講堂も新しくなっていました。入学式のお手伝いをしていた時のことです。新しい基礎大講堂に入る機会がありましたが、講堂内は非常にきれいで、ここで講義を受けることができる新入生がうらやましい限りです。

同窓生の方々には、新入生も含め我々学生がなにかとお世話になると思います。今後ともご助力の程宜しくお願い致します。(小尾 紀翔)

編集委員

- 福田利夫 (昭51卒)、平戸政史 (昭53卒)、藤田欣一 (昭56卒)、安部由美子 (昭57卒)、大山良雄 (昭63卒)、星野綾美 (平13卒)、岩崎竜也 (5年)、稲葉遙 (5年)、小尾紀翔 (4年)、成瀬豊 (事務局)、須田和花早 (事務局)